

市史通信

第45号

【発行日】2022年11月30日

【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032

横浜市西区老松町1番地
横浜中央図書館・地下1階

【電話】045-251-3260

【FAX】045-251-7321

【E-mail】

sisiriyu@ml.city.yokohama.jp

【ホームページ】

<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryō/>

shishiryō/



ボンゲー洋装店

ボンゲー洋装店資料

【目次】

- 戦後横浜の洋装店
—ボンゲー洋装店資料
- 戦争をめぐる市民の記録
- 横浜市市民博物館始末
- 子どもたちの冬休み
- 閲覧資料紹介
『横浜市の学童疎開』
(一九九六年)
- 市史資料室たより

戦後横浜の洋装店

—ボンゲー洋装店資料

はじめに

この稿では、横浜市史資料室が所蔵するボンゲー洋装店資料のうち、一九四五(昭和二〇)年の敗戦から一九六〇(昭和三五)年頃までの、横浜における洋装店とファッションショーに関するものを紹介したい。

「横浜山手洋装連盟規約及附則」に綴られた一九六一(昭和三六)年当時の会員名簿には、二六軒の洋装店名が記されている。ボンゲー洋装店は、その中でも「異彩を放つ」店であった。「ボンゲー(bon-gout)」は、フランス語で質の良い、センスの良いものという意味である。一九四九(昭和二四)年に澁谷英行が中区本郷町にボンゲー洋装店を創業し、一九九五(平成七)年に亡くなるまで婦人服のデザイン・製造・販売に従事した。店はその後も、二〇一三(平成二五)年まで続いた。父親の久吉が生糸貿易に携わっていたため、澁谷は一九一六(大正五)年にバンクーバー(カナダ)で生まれ、七歳の時に家族とともに来日した。長じて久吉が横浜で開業していた洋装店で、一九三五(昭和一〇)年から働きはじめた。

戦時中は、四年にわたり徴用された。横浜大空襲では店を失ったが、

一九四六(昭和二一)年に、中区本牧二丁目で「シスター洋装店」を再開。一九四九(昭和二四)年に独立した。技術力があり英語を流暢に話す澁谷の店には、会社の重役・米軍将校・各国領事の夫人など、外国人女性の顧客も多かったという。

洋裁ブーム

戦後占領期の日本は貧しかったが、同時期に「洋裁ブーム」が起こった。

洋裁技術の習得は、自身で洋服を作るという実用性から人気を得、加えて女性が自立する手段としても役立った。洋裁学校が数多く設立され、ファッション雑誌や各種のスタイルブックが発行された。洋服は、戦前には都市部を除いて日常的には着用されなかったが、ブームに乗ってまたたく間に普及した。

澁谷は、米軍住宅から出された新聞や広告を入手し、最新のファッション情報を得て、ドローイング(線画)を描いた。そして、製作した洋服を、ファッションショーで発表するようになった。ファッションショーは次第に流行し、全国の大々的な会場で、一日に何度も公演された。一九五四(昭和二九)年秋の東京では二三〇、全国では六百ものショーが行なわれたという。当時は、バイヤーや顧客に向けたプレゼンテーションの場ではなく、歌やダンスの演出もあり、演劇やコンサートのようなエンターテインメントとしての性格が強かった。

スタイルニュース社 ファッション・コンクール、賛助ファッションショー

『スタイルニュース』は、東京のスタイルニュース社から月二回(後に月三回)発行された新聞で、この時期の洋装文化を知るための貴重な資料である。ボンゲー洋装店資料には、第三六号(一九四八年六月)と第三七号(同年七月)が含まれる。

第三六号には、一九四八(昭和二三)年五月二六日に同社が初めて開催したファッション・コンクールの模様を掲載した。日本各地の洋裁学校に通う生徒等が寄せた発表作品は、七十二点。同時にデザイナーによるファッションショーも開催され、その賛助作品が二〇点余りであった。シスター洋装店にいた澁谷は、賛助ファッションショーに、イブニングドレス「白い夢」を発表した(写真1)。

会場の共立講堂(東京都千代田区)には、四千人の観客が詰めかけた。司会に松井翠声(漫談家)、審査員は渡辺紳一郎(新聞記者)、田中千代(ファッションデザイナー)、桑沢洋子(同右)、中原淳一(画家・同右)、春山行夫(詩人・随筆家)、高沢圭一(洋画家)、西田正秋(東京美術大学教授)、小野佐世男(漫画家)、吉田謙吉(舞台美術家)、花森安治(編集者)、宮本三郎(洋画家)、伊藤道郎(ダンサー・振付師)という顔ぶれであった。

ドロシー・エドガース(GHQ経済



写真1 イブニングドレス「白い夢」
『スタイルニュース』第37号より モデルはフローレンス西村 ボンゲー洋装店資料

科学局繊維課)による「洋装デザインについて」の講演もあった。エドガースは、戦前にデザイナーとして高島屋に勤務しており、日本人女性に洋装が普及しないのは一般的な知識を得る機会が少ないからだと考え、『洋装常識』(興文社、一九三七年)を出版していた。この時は、繊維品に不自由な状況下では、和服地を用いたデザインを研究するなど、アメリカのスタイルを真似るだけでなく、日本に適した良いデザインを考えて欲しいと述べている。

コンクールを參觀した内田艶子(内田服装学院々長)は、第一回としては、人気と識者の関心を集めた点で成功だった。しかし、髪や化粧が洋服とマッチしていない、歩き方がまづいなど、日本人が洋服を着こなす訓練が足りないことを指摘した。日本の服装界の水準が低いことはこの代表的なコンクールにさえ現れており、今後一層服装文化向上のために貢献するよう努力しなければならぬと痛感したという。

コンクールでは、自らがモデルとな



写真2 楽屋風景
『スタイルニュース』第36号より ボンゲー洋装店資料

る出品者も多かった。写真2は「晴の舞台の身支度に学友総動員で、お手伝いのウルワシイ楽屋風景」と説明されている。洋裁学校の生徒にも、洋服の中に和服姿の女性が混じっている。

日本デザイナークラブ 作品発表会

澁谷は日本デザイナークラブの会員で、クラブが開催した作品発表会のカタログや作品の資料が見られる。

日本デザイナークラブは、スタイルニュース社の第一回ファッション・コンクールが開催された一九四八(昭和二三)年に、銀座の洋装店のデザイナーを中心に発足した。翌年銀座大和ホールで、第一回ファッションショーを開き、以後春と秋年二回開催した。ファッションショーは若手デザイナーにとつて、著名なデザイナーの作品を見るとともに自身の作品を評価してもらう教育的な場でもあった。

澁谷は一九五〇(昭和二五)年に初めて作品を発表し、ファッション・エディタース・クラブ賞を受けた。

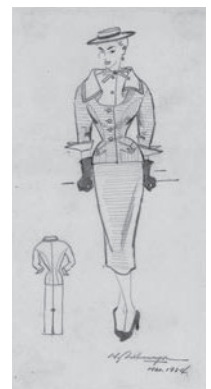


写真3 ツーピース
澁谷英行画・デザイン
ボンゲー洋装店資料

一九五四(昭和二九)年春夏ファッション作品発表会のカタログを見ると、東京会館で三月二四日・二五日、一日に三回(一〇時・一四時・一八時)もの公演を開催している。「プロگرام」の項目には、デザイナー、モデルとともに生地を提供した商社名を載せた。様々な繊維関連企業の援助を受けていたことがわかる。このころから全国的にファッションショーの数が増え、規模も大きくなっていった。

「作品出品者氏名」によると出品品は一一七点。クラブの顧問(田中千代・原田茂・山脇敏子・伊東茂平)や、森英恵の名前も見られる。澁谷がデザインしたツーピースも紹介された。生地は旭化成工業株式会社から提供された(写真3)。デザインを紹介したページには作品の販売価格が載り、ツーピースは一万一千円、ブラウスは二千五百円であった。大学卒国家公務員の初任給が、この年に八千七百円なので、かなり高価なものである。一般の女性にとって、こういったファッションショーは、見て楽しむものだったようである。

日本貿易博覧会 世界ニュー・ファッション・ショー

横浜で開催された日本貿易博覧会の会場でも、ファッションショーが催された。

日本貿易博覧会は、一九四九(昭和二四)年三月一五日から六月一五日まで、神奈川県・横浜市の主催で開催された。目的は戦後の経済復興を内外に示すとともに、最新の海外の生活文化を紹介し、世界の文化水準を国民に示すことだった。入場者数は三六〇万人であった。会場は第一会場(野毛山会場)と第二会場(神奈川会場)に分かれ、第一会場でファッションショーが開かれた。

『神奈川新聞』(四月二一日付)によると、世界ニュー・ファッション・ショーは、日本貿易博覧会と横浜貿易協会が主催した。伊藤道郎が演出、アーニー・パイル・ダンシングチームがモデルと舞踊を担当し、二二日から三日間演芸館で開催された。ドレスメー



写真4 出品作品
モデルはアーニー・パイル
ボンゲー洋装店資料

カー女学院(二二日)、神奈川県洋装商工業協同組合(二三日)、小川文字服装学院(二四日)が参加した。

澁谷は二三日に、神奈川県洋装商工業協同組合から出品した。作品の写真が残されているが、一九世紀末のスタイルからヒントを得たデザインである(写真4)。戦後間もない頃なので、材料の調達に苦心したという。

横浜洋装連盟 ファッションショー

一九五六(昭和三一)四月一日には、横浜市内に店舗を持つ横浜洋装連盟会員一五店が参加し、「一九五六春夏ファッションショー」を開催した。カタログによると、会場は一九五四(昭和二九)年に開館した神奈川県立音楽堂で、東京ファッションモデルクラブ会員にモデルを依頼し、二回(二三時・一五時)のショーを行なった。

目的は、服装文化の向上を図る、そして震災・戦災の影響を受けた横浜の洋装業界を、市の代表産業として出品物を通じて紹介する、さらに販路の拡



写真5 カタログより
下図は澁谷の作品
ボンゲー洋装店資料

張を図ることだった。そのため、出品作品はコマージュ・デザインに重点を置いた。単なる流行の紹介ではなく、美的要素はもちろん日常生活に繋がりを持つ、商品的価値を兼ね備えたものだという。

出品者名簿を見ると、参加一五店のほとんどが中区に所在し、その半数以上が元町にあった。当時有力な洋装店が、元町に集まっていたことがわかる。ボンゲー洋装店は、本郷町のほかに元町と千代崎町にも店があった。

ショーでは、春夏のワンピース、ツイード、アンサンブル、コート、イブニングドレスなど五四点を紹介した。カタログには、デザイン画とともに作品の紹介、出品店、デザイナー、モデル名が記載された(写真5)。それぞれの店の特色がうかがわれる。

澁谷英行はアフタヌンドレス、セパレーツ、スーツ、カクテルドレス、イブニングドレスの五点を出品した。写真6は、ショーの一場面で、観客がたのしげに舞台を見上げている様子が



写真6 カクテルドレス「シンデレラ」
県立音楽堂ステージにて、モデルは瀧美延
ボンゲー洋装店資料

見られる。この後も、横浜洋装連盟のファッションショーは開催されている。

おわりに

澁谷英行は、東京や横浜の洋装店が組織する団体の会員になり、戦後いくつものファッションショーで作品を発表した。その過程を通し、次のことがわかる。

当初は生地不足から、和服地も利用する様子が見られた。次第に復興した繊維関連企業が、生地を提供を行い、ファッションショーの後援をする様子が見られた。

横浜では、日本貿易博覧会のファッションショーで経済復興を、横浜洋装連盟のファッションショーで横浜の洋装業界を市の代表産業としてアピールする役割の一端を担った。

紹介した資料は、二〇二三年一月一四日(土)まで横浜市史資料室に展示します。

資料をご寄贈いただきました澁谷吉彦様、ご協力いただきました勝瀬さゆみ様に感謝いたします。

【参考文献】

- 多根雄一「戦後、山手の服飾文化を支えたボンゲー洋装店」『横浜』七二号(神奈川県新聞社、二〇二一年)四八―五一頁。
- 井上雅人「洋裁文化と日本のファッション」(青弓社、二〇一七年)。

戦争をめぐる市民の記録

昭和戦前期、人々は戦争と無縁ではいらなかった。そうした時代を生き、市民の記録が、市史資料室には多く寄せられている。その内、これまで未紹介だった資料からいくつか紹介したい。満州事変の際に召集された従軍看護婦、そして日中戦争と太平洋戦争で戦死した二人の兵士の記録である。

従軍看護婦石川シズ

前号でも戸塚海軍病院の従軍看護婦（正式には救護看護婦）を取り上げたが、今回は、満州事変に召集された従軍看護婦石川シズを紹介する。石川シズは一九一〇（明治四三）年新潟県三条に生まれ、三条高等女学校在学中に白衣に憧れ、同級生と一緒に日本赤十字社を受験した。二人とも合格し、一九二八（昭和三年）に女学校卒業後、希望して満州の奉天日赤病院に入った。

以下、石川シズの四女である小山芳美さんが、シズの日記などからまとめた記録をもとに経緯を記していく（小山芳美家資料）。シズは、「はじめじめた三条から抜け出して、満州という異国に行く事に憧れ」があったという。親は猛反対したが、白衣への憧れと共に、貧しさから「抜け出したい一心」で、希望を貫いた。

神戸港から乗船、旅順港に上陸して奉天に向かった。日露戦争の結果、満



遼陽衛戍病院に配属された石川シズ
小山芳美家資料

州南部の鉄道と鉄道付属地などを日本が租借して、南満州鉄道株式会社が鉄道経営と付属地の行政を担っていた。奉天（現瀋陽市）の市街地の大半は鉄道付属地とされ、そこに日赤病院もあったのである。

しかし、当時はまだ、病院の医師も中国人の方が多く、患者もほとんど中国人であった。言葉も通じず、同級生と二人「日本に帰りたい、帰りたい」と泣きじゃくったという。

病院での養成課程は、患者看護の実践ではなく、ほとんど看護学の勉強で、「試験、試験」に追われた。中国語の勉強もあった。負けず嫌いな石川シズは勉強に励み、一番の成績で卒業した。卒業後の一九三一年に帰国して、日赤三重支部山田病院に勤務した。ところが、同年九月満州事変が勃発すると、召集令状が届く。山田病院では、盛大な歓送会を開いてくれて、襷をかけて万歳三唱のなか送り出された。地元新聞でも、紹介されたという。両親も駆け付けて、神戸まで見送ってくれた。

石川シズは、満州の遼陽衛戍病院に配属された。看護する傷病兵の多く



入院中の齊藤準太郎（前左）と担当看護婦たち
ここに石川シズはいない
小山芳美家資料

は、石川シズの出身地の部隊、歩兵第三〇連隊（高田）・歩兵第一六連隊（新潟田）の兵士で、新潟県出身者も多く、新潟弁が懐かしかったという。

衛戍病院とは、軍駐屯地の病院という意味で、前線の野戦病院とは異なる。遼陽には、第一病院から第五病院があり、五人ずつ救護看護婦が配置されていた。石川シズは、第一病院担当だったが、第五病院の前をよく通った。その第五病棟に入院していたのが、後に結婚することになる齊藤準太郎だった。

齊藤は一九〇九年愛知県に生まれ、高等小学校を卒業後神戸の加藤商会に入り、横浜の店に勤務していた。徴兵検査の後おそらく現役入営で、一九三〇年に名古屋の歩兵第六連隊に入隊し、鞍山で守備についていた。そこに満州事変が勃発し、戦闘に参加して足の貫通銃創を負って衛戍病院に入

院していたのである。

満州事変以前、一九三一年一月一日から六月三日までの齊藤の従軍日記が残されており、民間人である中国人を捕らえたときの複雑な心境などにも触れている（小山芳美家資料）。

当時、石川シズは齊藤の名前も知らなかった。いつの間にか見かけなくなっていたが、帰国した齊藤から「突然、小さなミカン箱位の小包が送られてきた。横浜の野沢屋のチョコレートや靴下」などが入っていたという。男女の交際は禁じられていたので、呼び出されて注意を受けた。

一九三三年、召集は解除となり帰国する。三条まで帰る途中、慰問品のお礼をしようと桜木町に立ち寄り、齊藤と会い、職場である加藤商会まで一緒に行き挨拶した。その後、いったん帰郷したが、翌年には東京に出て、病院に勤めながら産婆の資格を取った。

一九三五年頃、再び帰郷していたが、齊藤が何度か訪ねてきて、結婚を申し込まれる。親が決めた婚約者があって反対されたが、シズは身ひとつで家を出て、東京蒲田の齊藤のアパートで暮らし始めた。翌年には、横浜の根岸のアパートに移り、長女も誕生した。

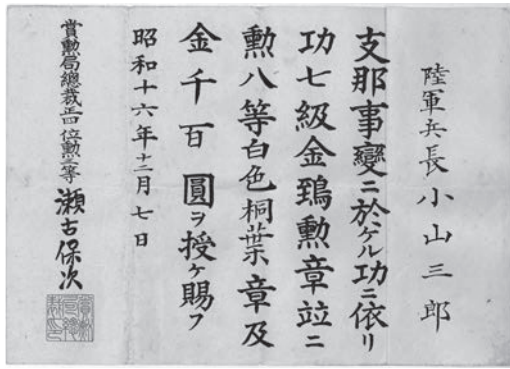
齊藤準太郎はその後、一九三七年には独立してシャツ製造の齊藤工場を設立したが、再び召集を受けて大陸に出征した。そして、復員後一九五一年に四二歳で病死する。従軍経験が、健康をむしばんでいたのかも知れない。

二人の歩んだ人生を見ると、昭和戦前期において軍隊と戦争は日常化されており、人々の人生と深く関わっていたことがよくわかる。

小山三郎と金鶏勲章

次に、戦死した二人の兵士の記録を紹介したい。その一人小山三郎は、太平洋戦争開戦直前の一九四一年二月七日に、中国山東省で戦死した。戦死後に贈られた金鶏勲章と軍隊手帳等が残されている(小山昭一家資料)。

一九一九(大正八)年一月二二日、横須賀市浦郷に生まれた小山三郎は、一九三四年三月に学校(一五歳という年齢からおそらく高等小学校)



金鶏勲章と勲記
1941(昭和16)年12月7日 小山昭一家資料

を卒業後、日本製鋼所に勤めていた。一九四〇年一月一日には、東部第六三部隊に入営している。やはり当時満二〇歳という年齢から、徴兵検査後の現役入営と思われる。

東部第六三部隊とは、横浜も含む連隊区で編成される甲府連隊の部隊を指し、ここでは伊集院部隊すなわち歩兵第二一〇連隊である。伊集院部隊と呼んだのは、連隊長が伊集院兼信大佐だったからである。入営して間もなく一〇日には、芝浦港を出港して北支に向かった。一六日に青島港に上陸して一八日には山東省の任地に到着した。第七中隊に配属されて、早速同地の警備についた。

実は、横浜市史資料室には、他にも歩兵第二一〇連隊に配属された兵士二人の資料が市民から提供されている。なかでも小野道正は、小山三郎と全く同じ経緯を経て同じ日に青島に上陸している(小野道正家資料、報告書『横浜の昭和を生きた人びと』横浜市史資料室、二〇二〇年参照)。その後、小野は一八日に第九中隊に配属されて、山東省の別の任地で警備についた。

現役入営したばかりの二人は、現地で教育を受け、二人とも翌四一年四月二〇日をもって第一期教育を修了したと軍歴に記されている。その後、二人の運命は大きく別れていく。小野は四月三〇日に暗号要員として連隊本部に分遣され、さらに同年八月に第三二師団司令部に分遣された。本部や司令

部勤務だったため、前線で激しい戦闘に参加することは少なかったようだ。

後の一九四四年、連隊が南方に移動の際も、小野は師団司令部に同行した。実は、この南方移動の際、歩兵第二一〇連隊の本隊が乗船した輸送船は、米軍潜水艦の攻撃により撃沈され、全滅に近い被害を受ける。小野は別の船に乗船していたので、無事にハルマヘラ島(現インドネシア)に上陸した。そして、そこで敗戦を迎え、捕虜となるが、無事復員することができた。

一方、小山は一九四一年四月二九日、補助衛生教育のため野戦病院に分遣された。隊付の衛生兵を養成するためである。八月には、中隊に復帰して再び警備任務につく。そして一〇月に館陶県に移駐し、二月七日に付近で戦闘となり、頭部貫通銃創で戦死したのである。同日、上等兵・兵長と二階級特進している。そして、兵士にとっては最大の名誉ともいえる金鶏勲章を授与されたのである。もともと、その頃には戦死者のみに与えられるものになっていたのだが。

戦死した日付の勲記が残されており、「支那事変ニ於ケル功ニ依リ功七級金鶏勲章並ニ勲八等白色桐葉章及金千円ヲ授ケ賜フ」と記されている。それぞれ塗箱に収められた勲章が残されている。「支那事変」とある通り、太平洋戦争開戦の一日前のことであった。また、遺族に贈られた軍人遺族記章も残っている。

重爆撃機操縦員園田定人

もう一人の園田定人については、軍歴が定かではない。本人の経歴に関する資料も残されておらず、一九三五年から一九三八年頃までの満州従軍時の写真と、一九四五年に戦死した際の資料が残されているだけで、この間の経緯がまったく不明である。

写真についても、その裏書きが当時のものと、後に追記されたと思われるものがあり、両者には年代などの矛盾がある。

当時のものと思われる裏書によると、一九三四年二月軍隊に入る前に二一歳であったこと、翌三五年四月段階で二等兵であったことがわかる。この間に入ったと思われる。なお、後の記録から園田は、長崎県西郷村(現雲仙市)出身で、連絡先は、横浜市の日ノ出町に住む兄豊であることがわかっている。

その後、一九三六年四月には満州に派遣されたらしい。派遣前の最後の夜の愛国婦人会との記念写真が残っている。六月には、国境警備の任を終えた後の写真がある。この時点で園田は、上等兵となっている。その後、一九三八年頃の写真では、追記の裏書きに伍長に進級したとある。写真の階級章は、一本線に星一つで確かに伍長のものと思われる。現役入営二年を終えた後の進級と推測される。そして、次



満州で国境警備につく園田定人
三浦由紀子家資料



伍長に進級した園田定人
三浦由紀子家資料

に残されているのは一九四五年五月の戦死関係の記録である。ところが、戦死時点で園田は、爆撃機の操縦員(少尉)となっていた。この間の経緯は、まったく不明である。すでに伍長に進級して年月も経っているのに、操縦員を志願して少尉候補者の教育を受けたことが考えられるが、いずれにしろ推測の域を出ない。ここでは、資料に基づき戦死の経緯について述べる。

園田が所属していたのは飛行第一一〇戦隊、陸軍重爆撃機飛龍の部隊である。以下、部隊の経緯については、戦友会による『旧陸軍飛行第一百戦隊靖19027部隊 つわもの達』(三浦由紀子家資料)の記述にしたがって記す。

同部隊は、一九四四年一〇月に浜松飛行学校で浜松教導飛行師団を母体として編成された新しい部隊だった。ただし、実動一〇機にも満たない戦力だったようだ。同年一二月にはサイパン攻撃、翌年二月には硫黄島への空輸任務、三月には九州に進出して各飛行場から沖縄作戦に従事した。八月までの一年足らずの間に、二一二人の戦死者を出すなど、多くの犠牲を出した。

三月から八月まで繰り返された沖縄への攻撃は、それぞれ四機から五機が参加し、毎回未帰還機を出す厳しい戦いだった。そのなかで、五月五日に行われた沖縄北飛行場(読谷村)攻撃では、出撃した五機の内二機が戻らなかった。その一機園田機に搭乗していたのが、園田定人だった。機長(操縦)の奥田楯昭少佐は第一中隊長で、園田は副操縦士だったのだろう。その他、航法・通信・機上機関と射手二人の合わせて七人が搭乗していた。

出撃機が未帰還の場合、考えられるのは、墜落したか不時着である。墜落の場合でも、撃墜や自爆などいくつかの可能性が考えられる。多くは僚機にも目撃されず、経緯は不明の場合が多かった。燃料が尽きる時間を経過しても消息が不明な場合は、事実上戦死扱いとなるが、時には不時着して、数日経って戻ってくることもあった。

園田の場合、五月一五日付で中隊長名の家族宛手紙(謄写版印刷)が残っている。すでに役場を通じて未帰還を報告したが、その後も調査中と記されている。その一方では、遺品を送るとあ

るので、すでに戦死と認定されていたのだろう(以下いずれも三浦由紀子家資料)。

さらに、五月二九日消印の第一九〇二七部隊長草刈武夫名の手紙が残されている。これは手書きで、園田定人の「戦死の戦闘状況」が詳しく記されている。それによると、この日の攻撃は夜間で、爆撃の後無電で「攻撃成功、我敵戦闘機の追尾を受く」と知らせたまま消息不明になったという。そして、「僚機の認めたる状況なく」、「飛行不能となり敵陣地に対し壮烈なる自爆を決行されたものと判断」したとある。「その自爆こそ壮烈、実に鬼神も哭かしむるものあり」と、讃えている。こうして、園田定人の戦死は、遺族に自爆として伝えられたのである。

この自爆という行為は、特攻が行われる以前から、日本陸海軍の航空隊では普通に行われていた。敵地に落下傘降下したり、不時着して捕虜になることを避けるため、あるいは、陸地から遠く、味方の軍艦が付近にない海上に不時着しても、鮫に襲われたり、溺れてしまうなど助かる可能性が低いと判断し、搭乗員は敵陣や敵艦を目標に自爆を選ぶことが多かった。

米軍は飛行艇・潜水艦などを要所に配置し、搭乗員の救助に努め、搭乗員も不時着や落下傘降下を選んだ。一方、日本軍は、組織的な救助が行われることは少なく、搭乗員も捕虜になるよりも死を選ぶことを良しとする風潮が強

かった。そうした日本軍の体質が、園田達の自爆を讃えさせたのである。

戦争の時代の記録

以上、三人の事例を紹介してきた。それぞれ、満州事変勃発、太平洋戦争開戦一日前、敗戦直前の沖縄戦と、劇的な場面に直面している。また、次第に時代の空気が緊迫していつていることも感じられる。

まだ平時の頃に、満州に行った石川シズと斉藤であったが、満州事変勃発により、石川シズは召集され、斉藤は負傷して入院し、そこでシズと出会い結婚する。こうした出会いが少なくなかったことは、同じ従軍看護婦である五十嵐晴江の日記からもうかがえる。

小山三郎の場合は、郷土部隊である甲府連隊歩兵第二一〇連隊に入って北支に出征し、一年後に戦死した。同連隊も、その後太平洋戦争開戦後に、輸送船が撃沈され、全滅に近い被害を受ける。いずれにしろ厳しい現実が待っていたのである。

園田定人の場合は、異色である。歩兵として陸軍に入り、どういう経緯かは不明だが、爆撃機の操縦員となり沖縄で戦死している。

横浜市民やその家族が、それぞれに時代を必死に生きた姿ではあるが、戦争が人びとの運命を左右していたことを感じざるを得ない。貴重な市民の記録として、ここに留めておきたい。

(羽田博昭)

横浜市市民博物館始末

一九二三(大正一二)年九月の関東大震災後、横浜市では震災を永く記録に留めておくために横浜震災記念館を設置した。最初はバラック建築が利用され、二八(昭和三年)には本建築の建物が野毛山に建設された。その後、同館は、三五(昭和一〇)年の復興記念横浜大博覧会の剰余金による刷新案が検討され、一度は立ち消えになったが四一(昭和一六)年から再び検討されて、翌四二年九月一日、横浜市市民博物館として新しく開館した。しかし、第二次世界大戦中であつたために何回かの企画展等を行ったのち、四四年一月、市役所等の移転に伴い観覧事業を停止した(廃止は翌年七月)。その後は、市会の移転、軍の一部使用などにより多くの資料は返却、または地下室に保管され、敗戦直後にはアメリカ軍に接収されるなど混乱を極めた。

展示資料の多くは各所蔵者の出品によるものであつたため、一九四七(昭和二二)年頃より返還の要望がいくつか寄せられるようになった。しかし、同館の後始末は、混乱の中で資料の所在確認から行わなければならなかつた。

戦争中の様子——旧館長・職員の見聞

先ず遡って、後述の元市民博物館残務整理委員会に旧館長中道等と副主事茨木彦蔵が提出した陳述から戦争中の

様子を見てみよう(「元市民博物館残務整理報告書」横浜市各課文書275-5)。

中道の陳述では、四四年秋頃から「漸次空襲激化」したため、観覧者を地下室に誘導避難させるために資料の整理を始め、また磁器等の破壊しやすいものは返却したという。一方で「出品者の多くは此空襲による自家の焼亡を予測して比較的安んずるべき地下室に保管を依頼」されたとも説明している。その後、敗戦により駐屯していた陸軍が退去することとなり「其混雑は筆紙に尽しがたく何物の仕業にや一夜事務室の扉を破壊して闖入書籍用具文房具其他殆ど紛失室内の乱雑さ呆然自失の外はありませんでした」と記し、対処するために残りの品は一切地下室に入



市民博物館全景
昭和十七年九月一日撮影

写真1 横浜市市民博物館の全景
出典：「横浜市市民博物館記念工八ガキ」半井清資料K-53。

れたという。また、地下室には各課の物資が入れられており吏員以外の者も自由に出入りする状態にあつたので、出品物の紛失を恐れ「館員と協力して一先当分の書籍器物巻物等も敵宅(敵)に運んで厳重に保管すること」にして、重量物やガラス製品など運搬困難な物以外は運び出したとも述べている。

その後、二度のアメリカ軍の接取中には地下室や事務室に入ることが困難になり、ある機会に地下室に入ると「自他ともに保存の品種は或は破損或は紛失して居りました、此の場の光景は時の半井市長殿も御覧になり非常に驚かれました」と記している。

このように中道等は戦中戦後の混乱を記し、その中で破損・紛失した出品物もあり、また、持ち出せる物は自宅で保管していると述べていた。

次に茨木彦蔵の陳述を見てみよう。茨木は開館まで遡っており、四二年南方事情と航空機についての展覧会(大東亜戦一周年記念資料特別展覧会)では二階が会場となつたので、二階の陳列品のうち借用品約六〇点を地下室へ、市所有錦絵や写真は館長室の置き戸棚に保管し、以後、陳列されたことは無かつたという。四四年武器の展覧会(日本の旗及武器武器展覧会)では一階が会場となり、一階の陳列品は地下室に入れて九月の終了後に再び陳列したという。翌四五年二月頃に軍が二階の講堂に駐屯するようになり、同室の皇室関係の陳列品は地下室内倉庫

へ搬入したと記している。同年七月には博物館が廃止となり軍の駐屯が一段と増した様に「感じており、今まで各室にあつた陳列品は全部地下室に搬入したと述べている。また地下室には施錠し見廻りもしたといい、そのときにあつた幾つかの陳列品を記憶していた。その後、鶴見区役所に異動となり「備品台帳一冊、借用品台帳五冊、出品物預書綴一冊、其他館に必要な書類十三冊ばかり」を元館長に引き継いだと述べている。

以上のように拝観停止以降の混乱の中で出品物の紛失や破損が起きていた。

出品者の返還請求

一九四七(昭和二二)年頃からいくつかの返還請求が確認できる。新潟県の大坪正義・正延は、同年五月に出品物の所在を尋ねたが市側からの回答が無く、一〇月に目録を添付して再び確認を求めている(一〇月二〇日付書簡、各課275-6)。東京都世田谷区の石井直も、七月に「幸ひ震災を免かれし事も聞き及び」資料の所在について尋ねている(七月二八日付書簡、同)。また史料調査委員添田坦からも「去る六月二十三日博物館出品物返還の事につきまして御多忙の処御迷惑なる要求を申出」ていた(一〇月二日葉書、同)。

この他にもあつたようだが、これらの出品者は再三問合せをしており、旧博物館側の調査は遅々として進んでない様子がうかがえる。

表1 旧横浜市民博物館出品物の返却状況 1947年～1950年

返却年月日	出品物品名	数量	単位	出品者氏名
1947. 5. 20	三浦導寸画像	1	枚	松浦久三郎
1947. 5. 20	三浦荒次郎画像	1	枚	松浦久三郎
1947. 9. 18	伝馬御朱印状(額面)	1	枚	軽部三郎
1947. 9. 25	市会議員写真及其他ノ写真	40	枚	秘書課長
1948. 2. 9	武漢集外十六点(書籍)	17	点	高瀬慎語
1948. 2. 9	和英語林集成外三十五点(書籍類)	36	点	高瀬慎語
1948. 2. 14	米船渡来日誌外	6	点	添田坦
1948. 2. 18	萬曆年記鑄銅小匁	1	個	上松蒔
1948. 2. 19	金川日誌外十巻種(委細領収書)	12	種	軽部亀松
1948. 2. 25	開港異文録異国船渡来ニ付ての噂	1	袋	海老原清太郎
1948. 2. 25	大岡越前守判決文、対決呼出状	2	枚	渋谷権蔵
1948. 3. 2	萬国新聞紙外四冊	5	冊	石井光太郎
1948. 3. 3	葉研	1	組	高橋延愛
1948. 3. 4	堤磯右衛門写真外四点	5	点	堤純子
1948. 3. 4	盗難届外四点	5	点	一ノ瀬安左衛門
1948. 3. 4	ヘラシカの台	1	個	尾形順一郎
1948. 3. 17	懸仏外	2	点	岩科清五郎代岩科清治
1948. 4. 14	明治天皇御尊影巻幅及高嶋易断五冊	6	点	高嶋嘉和
1948. 4. 8	中道等宅に保管されたる書籍を引継ぐ	—	—	社会教育課長玉岡三男
1948. 5. 5	黒皮肩紅威大袖外十八種	19	種	大坪正義代大坪正延
1948. 6. 11	吉田橋関門用袖ガラミ外	—	—	近藤栄太郎
1948. 6. 11	置物(鮭)外	—	—	石井直
1948. 10. 8	高嶋嘉右衛門氏写真外数葉	—	—	高嶋嘉和代内海勝二
1948. 10. 14	程ヶ谷御警衛外数点	—	—	軽部亀松
1948. 10. 25	蔵王権現外数点	—	—	鶴見総持寺室峰梅逸
1950. 6.	黒船見取絵及異人手記玉子之絵	—	—	堤純子

出典：「旧市民博物館 出品物返却之控 森田記」(横浜市各課文書 275-8)。
 注：名称等は原資料のママ。1948年2月以降は元市民博物館残務整理委員会による。
 1948年3月17日返却分には「但絵馬八再考ヲ要ス」の注記あり。

陳列品の確認作業

既に一九四五(昭和二〇)年一月、県史料調査委員でもあった元館長中道等は、県内政部長の「聯合国進駐軍ノ所作ニ依リ国宝重要美術品及史蹟名勝天然紀念物ニ関シ直間接ニ損害ヲ受ケタルコト」の照会に対し、「横浜市民博物館長トシテ同館地下室ニ収蔵保管中ナリシ諸種ノ陳列用品類極メテ夥シク損傷及喪失ノ憂目ヲ受ケ申候次第」

と調査済みの紛失品一覧を添えて回答している(前掲「残務整理報告書」掲載)。回答では、大坪正義蔵「明治天皇御使用煙草盆壹揃」他計四件、丹波恒夫蔵「朝鮮李朝初期青磁平鉢」、今泉栄一蔵「堆黒漆俱梨盆」が報告された。その後、確認と返却作業が進まず、市長宛に要望が来るなどしたために、元市民博物館残務整理委員会が組織された。長は教育局長長彦由亀一、課長小幡安、主事小川喜代司、嘱託中道等・

森田亀太郎・茨木彦蔵、書記石井光太郎、史料調査員添田坦の構成で四七年一月一日に設置された(元市民博物館並震災記念館「整理事務日誌」各課275-17)。

この残務整理委員会は、翌四八年二月に「残務整理が終了」したので報告書を提出し、また「今後の処理に就ては別途伺ひます」として同年三月に根本的な調査を提言している。

残務整理委員会の活動

前掲の「整理事務日誌」等により委員会の活動を見ていこう。

日誌は嘱託森田亀太郎(菁華)が記載し、一月一日、森田に残務整理事務嘱託の辞令交付(一日付)が行われた記載から始まる。翌一六日には整理事務が始まる予定だったが、中道等が来ないために延期となった。この後も中道の出勤は数えるほどであった。なお中道は一月頃に「解嘱願」を提出していたが(一月一九日森田菁華宛書簡、各課275-6)、辞職は許されずに残務整理の嘱託となっていた。四八年一〜三月には体調不良の届を度々送付している(一月二七日教育長宛、二月二七日秘書課小幡宛、三月五日秘書課長宛、同)。

残務整理は中道が来所した二二日から始まったが、最初の打合会が二六日に開催され翌年一月二日から実質的な整理を始めることとなった。整理には計画課・秘書課・庶務課からも応援

が来て行われている。

一月二〇日には中工事務所の運転手外一〇名により中道宅に行き、保管されていた出品物の運び出しを行っている。その翌日からは旧事務所内の調査を行い二三日に完了し小委員会を開催している。二六日から旧ジオラマ室の調査や地下室の調査を行い、出品者カードの作成も行っている。

二月になると出品者宅への出張も始まり、二月前半では、市内は添田、軽部、吉谷宅へ、市外は石井直(東京都世田谷区)、上松蒔(品川区)、大坪正義(新潟県中蒲原郡)、高瀬慎吾(県内愛甲郡)の各宅へ出張している。このうち吉谷華圃は出張の翌日に来所し各委員と会談している(三日)。また高瀬慎吾は直前に出品物を受領に来ていた(八日)。

一〇日頃からは「報告書ノ整理」が始まり、この頃から確認された出品物は返却されていく(表1)。高瀬慎吾には九日に五三件の書籍類を返却している。この数は二点の「寄託品目録」(各課275-8)の件数と同数なので、目録掲載の寄託品は全て返却されたものと思われる。一四日には、添田坦に「米国船渡来日誌」や「市場村より芝生村迄絵図面」など計六点を返却した。しかし、これは出品物の一部で、同日「教育局長室ニテ添田氏ヲ中心ニ会ギ」を行っている。

石井直宅には、二月四日に茨木・森田両名が打合せに出向き、一四日にも森田が出張したようである(昭和

二十二年度元市民博物館残務整理関係
市外出張命令簿」、各課275-16)。四日
には「貫市吏員二名御來訪被下其節の
御話に依れば兼て拙者より御貸申上候
物品中小物三個は保管しあり大物の行
方不明只今尚搜索中との事」を説明し、
「而して小物丈は早速に御届け」と
話したようである(四月二〇日教育局
長宛石井直書簡、各課275-6)。二四日
には、小川主事・石井書記が出張し海
老原清太郎・渋谷権蔵分を石井直に返
却している。しかし、本人出品物につ
いては返却が遅れており、四月二〇日
に督促の書簡が届いている。なお「出
品物返却之控」・「市外出張簿」・「整理
事務日誌」では出張や返却の日付の違
いや項目が記載されていないなどの異
同がある。例えば、石井直宅には出張
簿では三月二四日にも出張しているが
整理事務日誌には記載が無く詳細は分
からない。その後、石井直宅には六月
一一日に返却に赴いている(表1)。

新潟県中蒲原郡在住の大坪宅には、
二月四〜七日、三月二〇〜二二日に小
川主事が出張して打合せを行っていた。
その後、五月五日に返却しており
大坪正義の「受領証」が残っている。こ
れによると三件は「持カヘラル」と注記
があり来訪の際に持ち帰ったようであ
る。また五件は不要と注記されてい
る。その他は小口扱貨物で送られてい
る(七月一〇日「小口扱貨物通知書」)。

また後述の岩科家には、表1の注に
あるように「絵馬ハ再考ヲ要ス」となっ

ていたが返却し、五四年に岩科
家から戻されている。

このように残務整理委員会に
より多くの出品物が確認されて、
二〜三月には多くの資料が返却
されている。しかし、確認でき
ない出品物もあり総てを返却す
る事は叶わなかった。

二月二六日の会議では紛失物に関す
る出品者の要望が議題になっており、
大坪家は「家宝なる故進駐軍方面の調
査を乞ふ、それでも不明の節は特価に
依り補償を受けたし」、石井家・軽部
家でも「進駐軍方面の調査を煩したし」
とし、また総持寺は「準重要美術品な
るに付き徹底的に調査を乞ふ、進駐
軍方面は当方直接交渉の上でも可」と
し、何れも「進駐軍」に対する調査を要
望している(各課275-8)。

元市民博物館残務整理報告書

残務整理委員会は一九四八年二月付
で報告書を作成している。事務日誌の
「報告書作成」は三月五日が最後の
で三月月上旬に完成したと思われる。

報告書では出品物の一覧を掲載し、
中道等保管中の物、残務整理の作業の
中で発見された物に印を付けて示し、
また前述の中道・茨木の戦中戦後の説
明陳述を掲載している。市所有以外の
出品物では約二〇件が未確認となつて
おり、また出品者不明が九件あった。

これらの未確認の出品物について
は、この後どのように処理されたのか

品名	数量	出品者氏名	備考
東宮前社蔵入地	一坪	大坪正義	
如常時用茶碗	二枚		
...

写真2 「元市民博物館残務整理
報告書」案(各課257-4)

は殆ど分からない。確認された品は、
表1にあるように四八年中に殆ど返却
が終わっており、五〇年六月の堤家へ
の返却は新たに確認された物だと思わ
れる。

事務日誌は次年度(一九四八年度)四
月下旬で記述が止まり、六月一日か
ら再開されるが記述は少なく一〇月で
終わっている。その記述内容も民生局
の業務が主となっていた。

その後の経過

一九五四(昭和二九)年七月、岩科清
治から未返還出品物の返還請求がなさ
れた(各課275-2)。五六年八月には来
訪し市職員と共に旧博物館保管中の物
品を調査し、出品物が現存しないこと
を確認している。総務局では翌九月に
も、横浜市史編集室が保管していた
「元震災、市民博物館陳列品残存品」を
調べたが、岩科家出品物は残っていな
かった。

前年の確認を受けて岩科家では、
五七年三月に未返還品について賠償を
求めている。この添付文書には、四二
年四月の出品当時の事情について、「旧

家の所蔵品を市民博物館へ保管を兼て
出品するから出品して下さい、非常の
場合は地下室に保管するから決して御
心配せられないように」と説明があつ
たので出品を承諾したと記している。

またこの時の調査では残務整理委員
会の文書が「再発見」されている(各課
275-5)。先に引用した資料は殆どこ
の時に「発見」された文書だと思われ

る。年月日未詳の総務局「旧市民博物
館残務整理関係書類並びに陳列品の一
部引継について(伺)」(下書)は、「現
婦人会館勤務事務吏員森田亀太郎氏
の保管中「関係書類」について教育長と事
務引継を実施してよいかとの伺であり、
具体的には、「残務整理関係簿冊」二冊、
「残務整理報告書」二通、「残務整理日誌」
一冊、「出勤簿」一冊、「出品者名簿」一
冊、「出品物返却之控」一冊、「関係書状」
二一通、「借用証又は仮預り証」五通、「市
外出張命令簿」一冊、「出品者之控」一冊、
「洋野紙記載メモ」九点とラマ仏(青銅製
積尊金箔座像)一体であった。これらは
現存資料(横浜市各課文書)と概ね対応
している。文書が異動した職員の手元
に保管されていたことは、残務整理委
員会という組織の分かりづらい位置づ
けを示しており、また残務整理の曖昧
さも示していた。

【参考文献】

本誌第三号・第五号。

(百瀬敏夫)

子どもたちの冬休み

はじめに

前回は夏休み中の学校の恒例行事となっていた水泳教育や臨海学校をとりあげた。今回はそれと対比するように、横浜の小学校における冬休みがどのようなものであったかを一九三〇年代の学校資料や児童作文を中心にしてみていくことにしよう。

一、さまざまな「児童心得」

「冬休みは夏休みにも学年末休みにもない特殊な二つの特徴を持ってゐます。一つは年末と年始で即ちこの休み中にお正月を持つと云ふことであります。他の二つは気候がもたらす保健生活への自覚であります」。これは一九三五年の十二月に刊行された大岡小学校の校報『おほをか』第四号の記事である。当時の冬休みはおよそ一二月二五日前後から一月七日頃までの二週間であり、正月の過ぎし方と冬期の健康維持が重要な課題となっていた。大岡小学校では子どもたちに冬休みの間に心得ておくべき事柄を、次の八項目にしていた。

- 一、なるべく火鉢や炬燵から遠ざかせ、つとめて外気にふれる遊びを奨励する。
- 二、朝晩必ずうがひをさせる。
- 三、お正月には食べすぎないやうに気

をつけさせる。

四、夜おそくまで遊ばせないようにする。

五、往来での遊びをやめて人に迷惑をかけないやうにさせる。

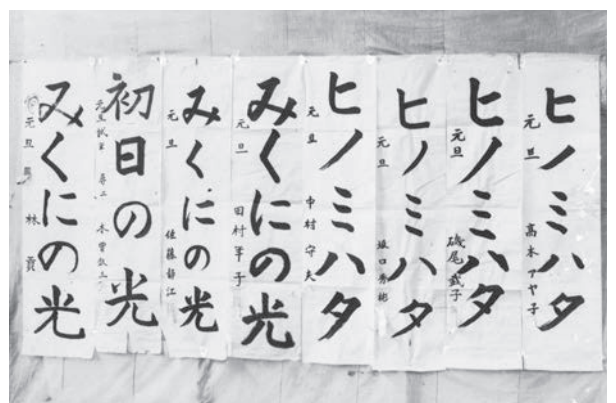
六、なるべく家事のお手伝ひをさせるやうにする。

七、正月三ヶ日は朝早く起きて神仏を礼拝し家の人はもとより近所の人々へも挨拶するやうにする。

八、冬休み中によく練習しお正月二日には書初を書かせる。

大岡小学校の「心得」は、暖かい場所にずっと居るのではなく、外での遊びを奨励するが、うがいなどはすること。そして正月には家の手伝いや神仏への祈祷、書初練習などにとりくみ、夜ふかしや食べすぎ、人通りの多いところで遊びはしないよう戒めていた。こうした注意喚起は他の小学校でも行っており、例えば岡野小学校は次の一二項目を連絡していた（岡野小学校『学校通信』第七号、一九三二年一月二〇日）。その内容は、「お家のお手伝ひをする」「書初めを書く」「夜おそくまで起きていない」「悪い遊びをしたり、道路などのじゃまになるところで遊ばない」など共通のものもあれば、「四年以上は日誌をつける」「時を定めておさらひをする」「できたら先生の所へはがきを出す」「正月の挨拶などのお作法の稽古をする」「小遣金はなるべくつかはない」「活動写真などを見に行かない」「凧揚げは電線にかけない様に きをつけ、誤ってかけても電柱に上らないですぐ会社へおしらせする」「出来たら先祖の墓参りをする」など、より具体的な要求をしているものもある。

また横浜小学校では一九三五年に十項目の「心得」を出していた（『学の友』第一〇七号、一九三六年三月）。ここでは、「冬のお休中は、どここの御家庭でもいそがしいのですから、じゃまならぬようにするばかりでなく、色々御用のお手伝ひをなさい」「休みになつても、規律正しく寝起したり、勉強したり、運動したりなさい」「割当てられた復習や、その他のことは、きつとやり通しなさい」「お正月を楽しくすることは結構ですが、夜更かしをしたり、悪い遊びをしないやうに気をつけなさい」「お正月は一年中の始めですから一年中の計画を立てたり、日記をつけ始めたりすることは大変に良いことです」「親戚やお世話になった人などに、年賀状を出すことは大変に良いことです」「暮や正月には、お客様がたくさんお見えになるでせうから、お作法をしっかりおやりなさい」「書初め、お稽古初め等は昔からの良い風ですから、なるべくしっかりおやりなさい」「凧揚げをして電線にかけたり、こままわしや、羽子つきに夢中になつて、往来の邪魔をしたりしてはなりません」「御馳走を食べすぎたり、間食をしたりしてお腹をこはさないやうに



【写真1】元旦の書初(横浜小学校) 横浜小学校関係資料No.27

しなさい」と多少は言葉を丁寧にしながらも、ほぼ同じ内容の注意喚起をしていたのだ。さらに同校では流行性感冒(インフルエンザ)の防疫対策として冬休みから三学期に「児童の各自にマスク使用を強要し運動場には絶えず撒水を施して塵芥を防ぎ、各教室にはストープに清潔なる晒木綿の湿布をかけて空気の乾燥を防ぐ」等を行っていた(横浜小学校『学の友』第一〇七号、一九三六年三月)。

こうした「冬休みの心得」は、日中戦争の勃発後も各校で出されていた。蒔田小学校は、一九三七年一月二月の連絡で「国を挙げて出征軍人やその遺家族に対し銃後の国民として満腔の感謝と後援とを捧げております時ですから御家庭に於かれても其の心を持って精々お子様に真面目な気分と細心な注意と



【写真2】マスクをつける子どもたち(横浜小学校)
横浜小学校関係資料No.27

「を持って御導き願います」と述べ、十の心得を示していた。ただしその内容は、「朝早く起き心ト体ヲ清メ神様ヤ仏様ヲ拝シ皇軍ノ万歳ヲ祈リマセウ」「夜オソクマデ遊バナイデ早く寝マセウ」「風邪ヲ引イタリ霜ヤケニナラナイヤウニ気ヲツケマセウ」「オ休ミデモ学校ノ勉強ヲシマセウ」「出来ルダケオ家ノオ手伝ヲシマセウ」「一月一日ハ新年拝賀ノ式ニ出マセウ」「一月二日ニハオ書初ヲイタシマセウ八日ニハ持ツテ出マセウ」「オ家ノ者ニ心配ヲカケナイヤウニシマセウ」「ムダナオ銭ハツカハナイヤウニシマセウ」「一月八日カラ学校ガ始マリマス元氣ナ體デ登校シマセウ」と、第一項以外は以前とさほど変わらないものであった『蒔田小学校学報』第三号、一九三七年一月二十五日)。

二、児童作文からみる正月

ところで、子どもたちは冬休みをどうすごしたのだろうか。いくつかの作文から見てみよう。

まず蒔田小学校の尋常三年男子は、「僕はお正月が待ちどほしいです。お正月にはたこを挙げたり、はねをついたりします。そればかりでなく、お客さんが来るとすごろくもします。家に居てもたこのうなりが聞こえます。お正月はみんなにこにこしている日です。はねつきのおともします。お正月は楽しく遊んだりする日なのです。僕は来年も楽しく遊んだりしたいと思います。お正月にはお宮も、大へんにぎやかだと思えます。おてらのはとも、うんと飛んできます。ひかうきも、うんと飛んできます。みんな元気で、外で遊びます。僕は来年も元気で、お正月をおくらくと思ひます」と書いている(『お正月』『蒔田小学校学報』一九三七年一月二十五日)。

また大岡小学校の尋常二年女子は、「お正月は何より楽しい日です。かるたあそびやはねつき、おにいさんたちは、たこあげ。おかあさんたちも、うれしそうにねんがじゃを出しに行きます。おうちの中では、かるたをよむこえ。外では、羽根つきの音。のほろではたこあげ、たこもうれしそうにいいよのぼります。草までも風が来れば「おめでたう」とこあいさつをして、にこにこしています。あと幾日たつ

たらお正月でせう。私は今でも時々お正月の夢をみます」と書いている(『お正月を待つ』『おほをか』第四号、一九三五年一月二月)。

正月は新年を迎えて親戚の集まりや来客のある特別な行事であり、この時にしか行わない華やかな遊びもあった。学校があれこれと注意喚起をしても、基本的にはうきうきとした気分とともに遊び回っていたというのが実情に近いかも知れない。

しかし、そうした華やかなお正月も、日中戦争、アジア太平洋戦争と戦争が長期化するに従って影がさしていく。一九四一年一月二月、対米英開戦直後の正月には次のような作文も登場するのである(筆者は尋常三年女子)。「うちのお父さんは、一月五日に南洋の方へ行きました。私はお正月の時はずいぶん日なのに、なんとなくさびしい気がしました。お母さんがおぞうにをこしらえてくれたので、おぢいさんとお母さんと私とで、おぞうにをたべました。私は食べながらも、お父さんのことをつくづく思い出しました。すると、そとでさむい風邪がひうひうと吹いています。私はなほなほ考えています。こんなに風が吹くから海は、ずいぶんあれて居るだらうと思ふと、お父さんも船の中で、おいしいおぞうにもたべられないだらうと思ふと、私はできるだけおいしい物は、おかあさんやおぢいちゃんにあげるようにしようと思ひました。そして、お父さんにも

沢山あもん袋をおくって上げやうと思ひました。そんなことをほんやり考えていると、おぢいさんが「よそみなんかしてぬないで、茶碗の中をみてはやくたべれ」と、おこられたので、私はあはくっておもちをたべたので、のどにひっかかってなかなか食べられませんので「御ちそうさま」と言つて、お膳のそばを遠く離れて、今までおぞうにを食べながら考えて居た事を残らずおかあさんとおぢいさんに話すと、お母さんが「ほんとにくらうをなさつてゐるでせうね。だから、順子ちゃんも一生けんめい勉強するですよ」と言はれたので、私は「はい」と言ひました。それからすこし遊んでねました。私は、眠くなるまでおとうさんの事を考へました(『お正月になつて』『学の友』第一一五号、一九四二年三月)。

おわりに

今回は各校の「冬休みの心得」や「正月」に関する児童作品を紹介した。学校は冬休みや正月も勤勉で健康にすごすよう要請していたが、その一方で子どもたちの作文からは正月の華やかな雰囲気や心待ちにしている様子が読みとれる。しかし、そうしたなかでも一九三〇年代後半以降には、戦争の影響が少しずつ、冬休みや正月の子供たちの生活にも迫っていたのだった。

(金耿昊)

閲覧資料紹介
『横浜市の学童疎開』
(一九九六年)

二〇二二年夏に開催した展示会「戦前・戦中期横浜の小学校——震災と戦争のはざままで」には、学童疎開を経験された世代の方が何人も観覧に來られ、当時の貴重な話をお聞きできた。また学童疎開をもっと詳しく取り上げてほしいとの声も数多く寄せられた。

学童疎開は、本土空襲の危機がせま一九四四年夏から、横浜を含む一三都市の国民学校初等科三年～六年生を対象に、「都市から農村部のより安全な場所に半強制的に分散移動させ」た政策であり、子どもたちは「親元を遠く離れ見知らぬ土地で、しかもいつ帰れるとも知れず、国民学校の児童として学習し生活が続け」た。これは近代日本の学校制度の歴史の中でもこの時期にしかない特異な経験であった(『横浜市史Ⅱ』第一巻下、一三三〇頁)。

『横浜市の学童疎開』は、横浜市教育委員会が一九九六年八月に刊行した。編集は一九九四年の学童疎開五〇年、九五五年の終戦後五〇年を前に結成された「横浜市の学童疎開五十周年を記念する会」が担当し、五六五頁にわたる重厚で豊富な資料集が生み出された。

本書は四部構成となっている。第一部「横浜市の学童疎開関係資料」は、国立公文書館、神奈川県立公文書館、横

浜市史編集室や市内の各校などが所蔵していた関係資料合計一〇一点を翻刻・収録している。ここからは学校や行政の動向をうかがうことができる。

第二部「疎開学童達の体験記」は、学童疎開を行った七七校(市立七三校、県立一校、私立三校)、横浜市立ろう学校、横浜訓盲院、中華公立学校の疎開経験者三二六名の手記を収録しており、その分量は三四四頁と本書の過半を占めている。集団疎開のみならず縁故疎開や残留児童の体験も収録しており、学童疎開体験の幅広さと深刻さを同時に感じることもできるだろう。

第三部「学童疎開関連研究・作品など」は、学童疎開をテーマにした横浜市民の文章記録を収録している。これらは短歌・俳句・詩・エッセイ・研究論文・小説などであり、さらに当時の書簡や日記、作文なども抄録している。

第四部「横浜市の学童疎開展示とイベント」は、一九九四年の学童疎開五〇年を記念して実施された展示会・上映会・シンポジウムの記録などが収録されている。二八年の歳月が経過した現在、これらも当時の雰囲気や物語る歴史資料となり始めている。

このように、本書は口絵や随所に挿入される写真も含めて、横浜における学童疎開の実情をさまざまな角度から読み込むことのできる希有な書籍である。開架図書にあり、入室すれば誰でも閲覧・複写できるので、関心のある方はぜひ一読をお勧めしたい。

(金耿晃)

《市史資料室たより》

【令和4年度横浜市史資料室 室内展示】
戦後横浜の洋装店—ボンブー洋装店資料

会期：開催中～令和5年1/14(土)

会場：横浜市西区老松町1番地

横浜市中央図書館地下1階

市史資料室展示コーナー

時間：午前9時30分～午後5時

◎入場無料

内容：横浜山手にあったボンブー洋装店の資料からデザイン画、ファッションショーのカタログ、写真などを通して戦後横浜の洋装店を紹介します。

【令和4年度展示会が終了しました。】

7/16(土)～9/24(土)に開催された「戦前・戦中期横浜の小学校—震災と戦争のはざままで」は、2668人に見学していただきました。この展示会には、若い方々も多く見学に來られていました。アンケートに次のような感想が寄せられました。

「せんそう中、子どもたちがどんなせいかつをしていたのかよくなりました。」(10代)、「子どもの教育が各学校の努力で試行

錯誤される中でも結局は時勢に翻弄される流れがよくわかった。」(20代)、「こども達の作文がとても素直に自分の心持を書いていながら世相を表していました。」(50代)。また、7/30、8/20、9/10に、展示解説を行いました。写真は8/20の様子です。

8/27(土)には講座「戦前・戦中期の小学校と子どもを見つめなおす」が開催され、29人にご参加いただきました。当日の講座は、YouTube(ユーチューブ)チャンネルでご覧いただくことができます。詳細は、市史資料室ホームページをご覧ください。



【寄贈資料】

1. 金近忠彦様 6点
横浜博覧会パンフレットなど

- | | |
|---------------------------------|--------------|
| 2. 森田正純様 | 473件 |
| 森田純司家資料追加、
森田純司家(歯科医会関係)資料追加 | |
| 3. 澁谷吉彦様 | 83件 |
| ボンブー洋装店資料一式 | |
| 4. 木村節子様 | 日露戦役記念木杯他 9点 |
| 5. 三浦由紀子様 | 出征兵士関係資料 18件 |
| 6. 吉村幹子様 | 横浜大空襲体験記他 5点 |
| 7. 清水健二様 | 鶴ヶ峰他分譲チラシ 1点 |
| 8. 小山昭一様 | 軍隊手牒他 6件 |
| 9. 城戸清子様 | 14件 |
| 手塚喜一郎資料 | |
| 10. 井上 攻様 | 12件 |
| 横浜市史調査関係資料 | |

【横浜市史資料室のご利用について】

現在横浜市史資料室の利用は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため予約制となっております。事前に電話・eメール等で利用方法等をご相談ください。

◇ 休室日の御案内 ◇

毎週日曜日及び
横浜市中央図書館休館日